

東南アジア近代における 文化の自画像の形成

1. 研究組織

研究代表者：関本 照夫（東京大学東洋文化研究所・教授）

研究分担者：内堀 基光（一橋大学社会学部・教授）

清水 展（九州大学大学院比較社会文化研究科・教授）

2. 研究のねらい・目的

この研究は、近代東南アジアの諸地域において「われわれの文化」という観念がどのように形成されたか、また発展しつつあるかを問う。

今日「文化」という概念は、人類史を通じ時と場所を異にするあらゆる集団に適用される。われわれは「縄文文化」、「江戸町人文化」、「古代ローマ文化」、「ルネッサンス文化」等々を、自明のものとして論じている。そうした語法が間違いだと言うのではまったくない。しかし、あまり意識されぬが同じように自明なのは、現在のような「文化＝ culture」の用法が西欧近代に起源し、古くとも18世紀末以前には遡らないことである。日本では明治以降初めて、culture や kultur の訳語として「文化」なる語が使われ始める。江戸時代の日本で使われた「文化」という語彙の意味は現在とはまったく異なり、重なるところがない。「江戸文化」といった概念は、その当の江戸時代の人々にとっては存在しなかったのである。

もちろん近代以前にもさまざまな人間集団が、別の集団との対比において「われわれ」意識をもち、「われわれの流儀・習慣」などについて語ってきたであろう。単に表現が変わっただけで中身は変わらないという見方も、可能かも知れない。しかしわれわれは、近代西欧に生まれその後世界中に伝播した文化という語と、この語をもちいて「われわれ」を語る制度とともに、重要な変化が起き、新しいものが生まれたと考える。今日に至る近代世界の編成は、この概念・言説制度を近代特有のものとして生み出し、また、それに影響されている。「古代クメールの文化」等々を論ずるのはもちろん意味のあることである。だがそれとは別に、西欧近代起源の概念と言説が世界中に流行し、あらゆるレベルの政治共同体が文化を語ることによって自己と他者を語り規定しあっている現状を、近代の世界史の問題として検討したいのである。文化は外部から客観的に発見される「もの」のようなものではなく、集団的自意識、あるいは集団的であることを主張する自意識として、近代の歴史のなかにこそ存在する。それはまた、近代世界における「地域性」というものを考える重要な手がかりともなるはずである。

東南アジアにおいて、文化の概念はまず西欧の語彙として、西欧植民者・東洋学者の手によって普及した。諸地域にそれぞれ固有の文化なるものを見い出していく制度は、植民地支配の対象である従属的な他者を作り出すに不可欠の手段であった。同じ概念はまた、外来語として、あるいはやがて各地に生まれる国語のなかに翻訳されて、支配される側の自己規定の言葉となり、ナショナリズムの言説の核となり、さらには、さまざまにレベルの異なる顕在的・潜在的な政治共同体が自己を作り出すに欠かせないものとなっていた。文化という概念と言説の起源・歴史的展開と現状の研究を通じ、東南アジアの近代が西欧起源の普遍的制度にどう反応し、外に対する内であるはずの自己を、またさまざまに区別される国や地域を、いかに想像し作りだしているかを検討するのが、われわれの目的である。それはまた、文化の研究と歴史の研究に橋をかける試みでもある。あらかじめ存在する独立変数としての文化をもって歴史を説明する見方をわれわれはとらない。他方、文化が政治・経済等々と区別された独自の領域、そのみとして研究できるような対象だとも考えない。文化は歴史のなかで形成され、また歴史の展開に影響する一つの作用・効果である。文化概念を研究者の側の視点で実体化する時に生まれる恣意性を避けるため、文化がそれぞれの地域や集団のなかでどう語られてきたかを問題とする。

3. 平成6年度の研究経過

文化の言説は、日常口語の世界からではなく、文字・出版を媒介にして発展したものだから、文書資料が研究の主要な材料となる。ただしその文書を、それが流布し意味を帯びる社会的コンテクストのなかで理解するため、地域社会の実地調査も必要である。昨年度、清水展が研究代表者となって組織した同じテーマの研究班では、先行研究や各人の手持ち資料による議論が中心だったので、今年度は現地調査と新たな資料の収集に重点をおき、ジャワ（関本）、サラワク（内堀）、ルソン（清水）の3地域で資料の収集と検討をおこなうことが出来た。資料として注目したのは、1）市井に流布してきた新聞・雑誌その他の印刷物、2）各地域で、広義の「文化財」として保存や振興の対象となったり、「文化的商品」となっている事物、3）ナショナリスト知識層が「われわれの文化」を論じた諸刊行物、4）教育・文化・観光等に関わる政府文書などである。文化概念の発展・普及は西欧からの借用に始まるものだから、現在諸地域に流布しているものだけではなく、植民地時代の資料も重要であった。

また以下のように3回の研究会を実施した。

第1回研究会：7月27日

今年度の活動について議論し、上記の点、各人の現地調査のスケジュールと方向、今後の研究会の予定などを確認した。

第2回研究会：12月22日（土屋班「外文明と内世界」と共催）

7月に関本が土屋班の研究会に参加した際の議論から、合同の研究会をもつことになった。

まず土屋班から弘末雅士氏が「近世北スマトラの内世界の形成」について報告した。報告は、16-17世紀のスマトラにおいて港市が興隆し、マレー、アチューなどの社会が形成される過程が、内陸後背地に、ガヨ、バタック、ミナンカバウその他の諸社会を分立・結晶させていく過程でもあったことを指摘した。そして、交易やイスラムの伝播にたずさわる南インド出身者、いわゆるクリンが、メスティソ的な存在としてバタック社会の形成の触媒となっていたことを、史料から明らかにした。氏の報告は、現在地図上に分布している諸民族社会、とりわけ古いものの残存とみなされがちな内陸諸社会が、広い地域に形成される新しい関係のなかから生まれ変化することを示唆する点で、近代の東南アジアにおける民族性やエスニシティーの研究にも寄与するものだった。

ついで、内堀基光氏は、「野蛮文化闘争：イバンの逆襲」と題し、マレーシアの国民文化がマレー人中心主義のベクトルをもって形成されることへの反応として、イバン民族文化の主張や制度化が目立ってきているサラワクの現状を報告した。取り上げられた重要な一例に、イバンの日常的慣習である「夜這い」ngayapがある。この習慣を野蛮と後進性の象徴として非難するあるマレー人の投書が、半島部の新聞に掲載された。これに対しイバンの知識層は、サラワクのイバン社会の内部で、つまりナショナルな次元というより自分たちのあいだで、激しく反論をおこなった。興味深いことに、これらの反論はありきたりの慣行としての「夜這い」の現状をそのまま擁護するというより、求婚をめぐる誇るべき伝統文化として美化され無菌化された「夜這い」像を作り出すものだった。

これをホブズボウム流に「伝統の創出」と言ってもよい。ただしイバン社会のなかでこうした言説は言説の次元に止まっており、近代化とセットになった新たな「伝統」により個々人の日常生活を否応なしに作り替えていくような、顕在的な権力作用が働いているわけではない。むしろ興味深いのは、中央政府が掲げる統一・開発・進歩の普遍原理に圧倒されつつあるインドネシア側ボルネオ（カリマンタン）のダヤク系諸民族集団に比し、はるかに強い自律性を保ちえているサラワクのイバンにおいても、この「夜這い」の「文化化」、新たな成文アダト法典（慣習法典）の作成、サラワク文学会の組織化など、印刷メディアに依拠した「われらの文

化」の語りが進行していることである。

第3回研究会：2月18日

第3回研究会は、本研究班の課題と重なり合う仕事を現在進めている2人のゲスト・スピーカーを招いておこなわれた。

永渕康之氏は「バリの『伝統』文化と植民地主義」の題で、植民地支配と西欧の白人の視線が今日あるバリ文化をどのように作り上げていったかを、報告した。オランダは20世紀初頭にバリを武力制圧する。征服するオランダにとって、バリの王たちは非道德な東洋専制君主であり、妻妾の殉死をとまなう壮大な王の火葬は野蛮のシンボルだった。征服したオランダは、バリに「文明に汚されない」すばらしい文化を見出し、また作り出す。バリ・ヒンドゥーの信仰と儀礼、バリ流のいわゆるカースト・システムは、むしろオランダ支配下に規範化された形を整えていく。かつての「専制君主」は保護されるべき伝統文化のシンボルとなり、野蛮のシンボルだった火葬は、観光客を引きつけるバリの一大文化ページェントに変わっていく。1920年代以降、アメリカやフランスを中心とする前衛的モダニズム、原始主義、シュールレアリズムなどの流れが、バリ文化ブームを作り出す。

永渕氏は、西欧との暴力的な出会いによって伝統的バリ文化が姿を変えていったという見方を批判し、「伝統」や「文化」を客体化し展示する政治的権力作用のなかにこそ、すぐれて近代の現象としての文化が姿を現すと見る。したがってそれは、おもに西欧の学者・芸術家によってこれまで作り出されてきたバリ文化の記述への解体的批判となり、文化をそれぞれの地域社会に一貫して持続するエッセンスとみなす「文化の本質主義（エссенシャルイズム）」への挑戦となる。永渕氏自身が報告で指摘し、議論でも話題となったことだが、西欧が権力的に作り出した「バリ文化の伝統」にバリ人自身がどう関わってきたのかは、まだ未解明の重要な問題である。独立後の今日のバリで、西欧人が作り出した文化像の延長上に、バリ伝統文化の本質主義を熱心に語り、ますます文化の制度化・規範化（プラス商業化）を進めているのが、当のバリ人だからである。それは、オリエンタリズムが当のオリエントの住民のなかにも内面化されているという、サイド自身が説く事態なのか。それとも、バリ島社会内部の階級・階層と支配の問題なのか。

永渕氏の提起は、われわれが問題としている「東南アジア近代における文化の自画像の形成」が、西欧の作る「文化の他画像」といかなる関係にあるのかという問題を、あらためて突きつけるものだった。

ついで足羽與志子氏は、「現代社会とサンガ：アジアにおける仏教の動向と市民社会」と題

して、報告をおこなった。

足羽氏は、みずから調査をおこなった中国福建省の廈門市、スリランカ、およびアメリカ東海岸諸都市の例に、タイ、ビルマ、ベトナムの例をくわえ、仏教のトランスナショナルなネットワーク化の現状を報告した。長い歴史をもつ廈門市の南普陀寺院は、1970年代後半の中国経済開放政策以来、新しい発展をとげている。とりわけ顕著なのは宗派を問わない交流の進展と、華僑ネットワークに乗った国際化である。一方では海外華僑が参拝・観光・修行のため続々と廈門を訪れ、また南普陀寺院の僧が、とくに北米を中心に現地寺院に派遣されている。こうしたトランスナショナルな動きは、アジアの仏教国の多くに現在見い出されるものであり、それにとまって仏教と市民社会の新たな結びつきが進展しつつある。スリランカや東南アジア諸国では、経済発展、都市中流層の拡大、国境を越える人・物・情報のフローの拡大により、仏教サンガと市民と国家とのあいだの新たな関係が出来上がりつつある。足羽氏によれば、今日の日本仏教はこうしたトランスナショナルな動きからまったく取り残されている。

永渕氏の報告は、植民地権力により囲い込まれ客体化された文化像の形成を問うもので、現在を規定する過去を歴史的に問題にする。これに対し足羽氏の提起は、国民国家、偏狭なナショナリズム、ファクショナリズムをこえる市民社会が、トランスナショナルに形成される可能性を、現在から未来への展望として提起するものである。現在は20世紀前半の時代と異なり、国民国家やナショナリズムの限界が露呈してきている時代でもある。しかし経済や技術の国境がたしかに希薄化しているなかで、世界は単にボーダーレスの単一世界社会に向けて動いているのか。逆にボーダーレスの時代だからこそ、政治と文化のさまざまな次元でボーダー作りの動きが進行しめるのではないか？ 新しいトランスナショナルなネットワークを「来たるべき市民社会」と呼ぶ語法は適切なものか？ こうした点に討論が集中した。

4. 研究の成果とフロンティア

関本照夫

今年度は、以前からおこなっていた科研費による共同研究の成果として、船曳建夫との共編著による『国民文化が生れる時』（6. 研究業績参照）を刊行した。これは「生きられる文化」、すなわち非意識的に実践されている文化ではなく、さまざまな共同体によりむしろ声高に語られ規範化される文化の諸相を、東南アジア・オセアニアの諸例より検討したもので、この班の研究はそれを受け継ぎ、事例研究の面でより深めようとするものである。

昨年度末（平成5年度）のことになるが、関本は「総合的地域研究」の全体シンポジウムに

において「外文明と内世界? : スリナムのジャワ人」の題で発表をおこなった。そこでは、南米スリナムに19世紀以来移民していったジャワ人の例を引きながら、あるがままの文化の内世界は語られぬかぎりで存在するのではないかと提起した。すなわち、文化がある地域や集団の属性として客体化して語られ、文字その他の複製媒体に乗ったとたんに、対象としての文化はすでに凍結し規範化したものになってしまうのではないか、ということである。言い換えるなら、文化は語られたとたんに生きられる安定した現実ではなく、一つのイデー、一つの可能性にすぎぬものとなる。したがってさまざまな政治共同体はこれを、行政手段、公教育、そしてとりわけマスメディアを動員して、観念上固定化しようとする。学者が語るさまざまな文化像も、こうした広い意味での権力作用、「文化の政治」と無関係ではありえない。あるがままに実在する文化像を求めようとするより、文化をめぐる交錯する権力作用を近代史の問題として探求すべきだということである。

さらに8月より11月はじめまで、この重点領域研究の坪内班メンバー山下晋司氏を代表とする科研費海外調査で、インドネシアの中部ジャワに滞在した。第1の課題は、ジャワ更紗（バティック）産業の社会的・民族誌的調査、第2の課題は、今日のインドネシアにおける文化をめぐる言説と文化状況を、おもに地方新聞の紙面を通してさぐることだった。後者の一端は「インドネシアのドラえもん『民族文化』」の題で発表された。第1の課題は、ジャワでバティック産業が商業的に確立する19世紀末以来の経済史・社会史・政治史を、今日までたどろうとする作業の発端である。われわれの班のテーマと直接関連するのは、20世紀初頭に、オランダ植民地行政とソロ・ジョクジャの宮廷との合作により、価値ある存在としての「ジャワ文化」が語られるようになって以来、今日に至るまで、バティックがどのように「誇るべき文化遺産」となってきたかということである。

今年度の調査でおもに得られたのは、バティック産業に直接関わる文献史料やインタビューと観察の結果であり、バティックをめぐる文化的語りについては、各種文書館の史料や植民地期以来の新聞雑誌等の探索が今後必要である。それでもこれまでに、以下の点が明らかになった。

- 1) バティックの商業化と「質の低下」を憂えるという今日しきりに聞かれる言説が1920年代にすでに現れている。
- 2) おなじ20年代に、バティック染めの技法を「西欧人も真似できないジャワの秘法」と唱い上げる商業広告がソロ市の華人商人によっておこなわれている。
- 3) 今世紀初頭以来、おもに華人やオランダ混血のバティック企業家により、工芸的あるいは

はファッションとしての高級文化商品化の道が開かれてきた。

- 4) スカルノ時代には、大統領の民族主義的レトリックとしてバティック、とりわけ蠟置きの女性労働がほめそやされた。だが、バティックは第一義的には下層民衆の生活必需品と位置づけられ、「人民衣料食糧政策」の主要な対象だった。結果は原料綿布独占輸入卸売権をめぐり利権と不正が横行した。
- 5) スハルト新体制下に入り、大規模な繊維衣料産業が発達したことにより、従来のバティック産業は大きな打撃を被るが、とくにこの5～6年、拡大する都市中上流層のあいだで、文化の香りのする高級ブランド商品、あるいは観光土産品としてのバティックに対する需要が伸びている。

以上とならんで興味深いのは、伝統バティック布生産の核である蠟置きの女性労働である。これは外部の者の目にはきわめて洗練された高度の工芸的技術である。しかしそれは昔から一貫して、おもに農村女性の副業に依拠するもっとも低賃金の仕事であり、工芸どころか熟練労働ともみなされていない。今日に至るまで、こうした技術をもった女性労働の供給は豊富で考えられるかぎり安価であり、企業家のあいだに人手不足を嘆く声は聞かれない。当の女性たちに聞いても、小さい頃から見よう見まねで自然に覚えた、いわば誰にも出来る仕事と認識されている。一方そうした仕事の産物には、ジャワ伝統文化のアウラがつきまとい、企業家・デザイナーの名がブランドとなってきわめて高価に売買される。つまり、日常生活のなかで自然に身に付いてしまう、ことさら語られることもない実践の上に、異種のものが接ぎ木されるかのように、声高に語られる文化価値がそびえているのである。このバティックの例からも、近代の文化というものが、日常の実践から距離を置いたものであり、商品、資本の増殖、権力の秩序化作用といった背景から観念的に生み出されるものであることが窺える。

文化は政治経済的な「赤裸々」な現実と離れた無垢なものではなく、文化を語り文字に定着する作業も無垢なものではない。われわれの大きな目標は、文化の批判を通じた近代の批判的再検討にあると考えている。

清水 展

今年度は、ピナトゥポ山大噴火(1991年)によって故郷のピナトゥポ山を追われ、再定住地での新生活を始めているアエタの人々の被災体験、伝統文化(噴火前の固有の暮らし)、新しい環境での生活等についての、語りのテキストの整理・翻訳の仕事をおもにおこなった。テキストは、1993年度に実施した現地調査によって収集したものである。

彼らは、突然に投げ込まれた災害状況の深刻さと被災体験の強烈さから、あるいはまた平地

キリスト教民、NGO関係者、政府職員との接触をとおして、アエタ（ネグリート系少数民族）であることの自己認識を、日常的に強要される状況に置かれてきた。噴火の被害をもっとも深刻に被り、最大の犠牲者を出し、さらには長期にわたって苦難の生活を強いられるという共通の体験が、「われわれアエタ」意識を再強化している。そのうえ、平地民の側からの偏見のまなざしと、政府職員や政治家による物資のピンハネ・横流しに対する怒りなどから、かれらは、アエタであるがゆえに差別され、同時にまたアエタであるゆえに国内外のNGOや慈善家から、優先的で格別な配慮と支援を受けていることを自覚している。

すなわち、噴火という受難の体験をとおし、さらには平地民や政府・NGOの援助活動をとおして、アエタであることの自意識や民族意識が強化されているのである。そうした自覚が個人々の語りのなかに見いだされることを確認した現段階から、さらに一步進んで、今後は集合的な民族意識がいかに関表現され、語られるかを、「生成のただなかにある新たな民族自画像の作成作業」として捉え、その企てに関する同時進行形の研究を進めていきたい。そのため、95年1月末から2ヶ月ほど再調査を実施した。

内堀基光

今年度は、9～10月にサラワクでおこなった現地調査をふくめ、イバン社会の近年の変容過程の研究を進め、マレーシア国家のマレー文化政策とイバンの集合的自意識との相互作用を検討した。現在焦点を当てているのは、イバンの神話・伝承に現れる英雄形象を他地域の例と比較して検討することである。生成しつつある民族文化あるいは地域文化のなかで意識的に前面に押し出されてくる、英雄的な形象の特性に焦点を当てることにより、それぞれの文化における個性の自覚化の様相が鮮明になる。英雄的な形象がどのように選択され、外文明に対する内なる文化世界を担う実行者として描き語られるかを検討した。英雄形象は文化の自覚にとってきわめて具体的なイメージを提供するものであり、宗教から文芸・音楽・美術にいたる文化のあらゆる側面において、その文化の理想像を提示する。文化の個性として称揚されるものが、純粋に内発的なものではなく、その文化がみずからを対峙させる外の文明との反照過程から生み出されるものである以上、個性の体现者としての英雄形象は外文明のもつ英雄形象との相関のなかで形成される。こうした視点よりイバンおよび周囲の社会の事例を示す資料の分析検討を進めている。

5. 今後の課題

以上述べたように、ジャワ文化とバティック、フィリピン少数民族アエタにおける外部から

与えられた像と生成しつつある自画像、そしてイバンの英雄形象をめぐる事例研究をさらに継続する。2節に述べたように、問題は現在見い出される口頭の語り以上に、そうしたものを規定している文書資料の間テキスト的な歴史的累積に関わっている。それらを同定し読み解いていく仕事にはかなりの時間がかかるので、まず中間的成果を発表することになろう。また、3つの事例研究を同じ平面で比較の視座に乗せ、さらに日本内外の関連研究と照らし合わせていく作業も必要となる。

ジャワ文化を客体化して価値づけるのに非常に大きな役割を果たしたマクヌガラ宮廷の7世王は、1932年に、オランダ人とジャワ人エリートの聴衆を前にオランダ語でおこなった著名な講演のなかで、ジャワの「非常に高い文明」について語った。その後権力を掌握した国民国家のナショナリズムに受け継がれていくこうした視線は、ルソン島の少数民族アエタや、サラワクの優勢な山地民族イバンとは、それぞれ位相を異にしている。しかしながら、むしろ文脈を異にする諸例を連ねることによって、外部の目と内部の目の交錯による文化像生成過程の共通性を浮き彫りにできるだろう。ただしそのためには単に事例を並べるのではなく、議論の枠組みを作る理論的作業がさらに必要である。それは近代植民地主義・帝国主義の文化的論理の探求ということになろう。さいわい現在では、日本でも国外でも「近代と植民地主義」「植民地主義の文化」、そして「ポスト植民地状況」についての研究が勃興している。それらを批判的に摂取する作業が、われわれの助けとなるだろう。今年度ゲストスピーカーを招いておこなった研究会も、われわれの試みが孤立したものでないことを教えてくれた。

ナショナリズム、国家・国民形成についての議論、あるいはエスニシティについての議論は、今から少し前に盛んだったもので、われわれの試みは、それを文化の側面で後追いする後衛的なものと見られるかも知れない。今より大きな注目を浴びているのは、トランスナショナル、ボーダーレス、国家を越えるものといった諸現象である。だがわれわれの意図は、国民国家建設の成功条件を探ったり、その成功物語を語ろうとするものではない。文化の語りはその始源以来、世界大の相互参照の枠のもとで成り立っている。1個の共同体内に閉ざされ完結した文化の語りはありえない。文化の語りの主体として今のところもっとも特権的な地位を保っているのは、国民社会であり、またその下に包摂された諸地方やエスニック集団である。一方そうした語りの自明性を脅かしているのが、トランスナショナルな文化現象であり、また越境的（ディアスポラの）文化主張である。後者が前者の対抗的補完物に止まるのか否か、この重点領域研究の全体のテーマとの関連で言えば、国家原理とは異なる文化の主体としての「地域」はあり得るのか。こうした点の検討も今後の課題となる。

6. 研究業績（平成6年度発表分）

関本照夫

『国民文化が生れる時』（船曳建夫と共編著）リポート、1994.

"Pioneer settlers and state control: The case of a Javanese migrant community in Malaysia."
Southeast Asian Studies, 32, 1994.

「インドネの社会」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいインドネシア・第2版』弘文堂、1995.

「ジャワにおける行動の美的規範と社会秩序」清水昭俊編『洗練と粗野—社会を律する価値』東京大学出版会、1995.

「インドネシアのドラえもん」『民族文化』、『民博通信』68, 1995.

内堀基光

「森の獲得戦略と象徴化」大塚柳太郎編『資源への文化適応』雄山閣、pp. 171-194, 1994.

「民族の消滅について」黒田悦子編『民族の出会いのかたち』朝日新聞社、pp. 133-152, 1994.

清水 展

「再臨する宗教・再生するデモクラシー：フィリピン『二月革命』とカトリシズム」田辺繁治編『再生する宗教』京都大学学術出版会、1995.